武蔵野日曜聖書講筵　降誕節

唯一人者

――ルカ伝第1章26～56節――

１９７６年12月19日
小池辰雄

神さまが久しく待っておられた　懼れなき世界に入れてやる　絶対次元の霊をいただく　バカにならなくては　十字架の門　私自身が唯一人者とされる　有機体的構造　汝然り、我否　キリストに焦点　唯一人者を受けとれば唯一人者になる　天の歴史に記される　すべては神有
キリストの霊は何ものとも代えられない　私たちの中にキリストの降誕を実現する　祈り

【ルカ1・26～56】

26その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町における処女
のもとに、神より遣さる。27この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁
せし者にて、其の名をマリヤと云う。28御使、処女の許にきたりて言う『め
でたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』29マリヤこの言によりて、
心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思い廻らしたるに、30御使いう『マ
リヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31視よ、なんじ孕りて男子を
生まん、其の名をイエスと名づくべし。32彼は大ならん、至高者の子と称え
られん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33ヤコ
ブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』34マリヤ御使に言う『わ
れ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35御使こたえて言う『聖
霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの
聖なる者は、神の子と称えらるべし。36視よ、なんじの親族エリザベツも、
年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや
六月になりぬ。37それ神の言には能わぬ所なし』38マリヤ言う『視よ、われは
主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。
39その頃マリヤ立ちて、山里に急ぎ往き、ユダの町に到り、40ザカリヤの家
に入りてエリサベツに挨拶せしに、41エリサベツ、その挨拶を聞くや、兒は
胎内にて躍れり。エリサベツ聖霊にて満たされ、42声高らかに呼ばわりて言
う『おんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の実もまた祝福せられたり。
43わが主の母われに来る、われ何によりてか之を得し。44視よ、なんじの挨拶
の声、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びおどれり。45信ぜし者は幸福

なるかな、主の語り給うことは必ず成就すべければなり』46マリヤ言う『わ
が心、主を崇め、47わが霊は、わが救主なる神を喜び奉る。48その婢女の卑
しきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世の人、われを幸福とせん。
49全能者、われに大なる事を為し給えばなり。その御名は聖なり。50その憐憫
は代々、畏み恐るる者に臨むなり。51神は御腕にて、権力をあらわし、心の
念に高ぶる者を散らし、52権勢ある者を座位より下し、卑しき者を高うし、
53飢えたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給う。54また我ら
の先祖に告げ給いし如く、55アブラハムと、その裔とに対する憐憫を、永遠
に忘れじとて、僕イスラエルを助け給えり』56斯てマリヤは、三月ばかりエ
リザベツと偕に居りて、己が家に帰れり。

●神さまが久しく待っておられた

クリスマスを迎えて36回ですかね。１９４０年から集会を始めたから、36、37回になる。クリスマスのお話は、私はあちらこちらといろんな角度から話したから、もう種はないわけです。けれども、お聞きなる方では、新しいかたもいらっしゃるわけですが。しかし、「唯一人者」と題して語るのは今日が初めてです。パッとその題が与えられるんです。それであとは何も考えない。題が与えられると、もうそれで壇上に立つまでは何も考えない。なにごとも、焦点をつかむことが大事なんです。皆さんはいろんな仕事をなさいますけれども、中心のないことはダメです。唯一人者という題がひらめいたら、私はこのクリスマスは勝利であるということを確信いたしました。集会は、私は毎回を一回限りと思ってやってます。本当は、一回ごとに解散したっていいけれども――まぁ、そんなことはする必要はないけれども――決して習慣でやっておりません。皆さんはそういう意気込みで集会に臨んでいらっしゃると思います。

私は１９４０年から36年間やっているわけですが――まぁ、家内は一貫して一緒にやっていてくれました――最初から今までやっているかたは他にはいない。多くの人がいろんな事情で去って行きました。どうでもいいです、去りたい人は去れば。私はひとつもそういうことをどうこう思っていない。集会所の壁に第一回からずっと夏の特別集会の集合写真がかかっている。この集会に来た人のほとんどの人が――まだこの写真に外れている人もありますけれども――ここに映っている。私は時々ここに来てこの写真を見て、去って行った人たちのために祈っている。それは、帰って来いということではない。その人たちが本当のものをつかんでもらいたい。それだけです。どうせ、私は破れ器ですから。人間小池というものに希望を置くかたは、どうぞ、いつでも出ていってもらいたい。

私はキリストに希望を置いている。キリストに生きている人間ですから。そのキリストという唯一人者、これは私の生命です。これは全世界が何と言おうと、私はこのキリスト

に捕まえられながら進んでいく。私自身はどんなボロ器でも、そんなことは問題じゃない。そういう福音に私は生きている。パウロも

「我は罪びとの首（かしら）」

と言いました。しかし、キリスト自身が「罪びとの首」となって十字架にかかった。このキリストを他にして私の立場はない。

そのただ一人の唯一人者という、ただ一人のキリスト。これは今、讃美歌に

「久しく待っていた」

と歌っていました。誰が久しく待っていたんですか。この旧約の歴史が、そして神さまご自身が久しく待っておられた。私たちがではない。神さまはなんとかして人類を本当に救おうとして、全く独一の手段をとって、このクリスマスに天界の「神の言」たるものが——ヨハネ伝1章1節です——地界にナザレのイエスとしてマリヤから生まれてきた。父は聖霊の働きをもっておられた神さまですから。マリヤというのは名も知れない女性です。どこの誰だか分からん。とにかくナザレの女というだけの話です。ヨセフの方は血統がはっきりしている。マタイ伝1章にずらっと血統が並んでいてヨセフは歴々たる血統を持ったところの夫である。しかしながら、そのマタイ伝1章を開いてごらんなさい。

「1アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。2アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダとその兄弟らを生み、」（マタイ1・1～2）

アブラハムは即ち信仰の祖とされる、信仰の父です。ダビデはメシヤの型とされている。即ち、アブラハムの信仰とダビデのメシヤ性というものを両方とも、本当の内実において、現すのがこのイエス・キリストです。それでずっと、系譜が掲げられていまして、

「16ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生めり。此のマリヤよりキリストと称うるイエス生まれ給えり。」

というけれども、このヨセフは普通の意味における夫ではなかった。そのことはマタイ伝でもルカ伝でも書いてあるとおりです。ヨセフはマリヤを、「これはちょっとおかしいな」と思って、離縁しようと思った。けれども、

「懼（おそ）れるな。マリヤに宿ったものは聖霊によるのだ」

という示しによって、ヨセフはそのままにしていたわけです。マリヤにも「懼れるな」という示しがあった。

●懼れなき世界に入れてやる

地上は懼れと疑いの世界です。何かというとすぐ恐がってみたり、疑ってみたり、また争ってみたり、妬んでみたり。この地上はしょうがない世界です。これが罪の世です。恐れ疑い、妬み争い、憂い、背（そむ）き。こういった人間の情けない事態。「心の清き」というのはそういう

事態から外れていることが「心の清き」というんです。次元の違った世界に入れてやるということです。「懼れるな」というのは、

「懼れなき世界に入れてやるぞ」

ということだと私は語りました。相対次元にいるうちは、いつまでたっても始まらない。どんなに運命環境をよくしたってダメです。運命環境の問題じゃない。本当の現実の問題なんです。相対的なこの現実の奥に、絶対現実がある。また、絶対次元の世界がある。

本来、私たちの魂はそれに属している。絶対次元の世界を呼吸しなければ、本当は生きることができないんです、生きているような顔をしているけれども。健康だとか病気だとか言うけれども、みんなこれは「病める者」です。魂も肉体も実はみんな病んでいるんだ。本当の健やかさというのは、相対的な病気だとか、相対的な健康ではない。もうひとつ奥の、もうひとつ次元の違ったもの。そこが福音の世界です。創世記から黙示録まで、この惨憺たるイスラエルの歴史をとおして、聖書が与えようとしている世界なんです。

その惨憺たる事態をあるがままにみんな書いてある。人間のあらゆる悪がここに出ている。何もごまかしてない。けれども、それを本当の神の国に、救いの世界に入れようとして、光が臨んできた。愛の力が加わってきた。これが聖書というものなんです。だから私は、

「聖書は多次元的なドラマである」

と言っている。なぜ、そういうことをはっきり言わないかと私は思う。いわゆる聖書の研究なんかいくらやったってダメだよ。

そういう世界から語られているから、どんなに他の思想がきましても、この聖書をやっつけることができない。人間の思想なんてもので聖書はどうにもならん。イズムなんていうものよりかはるかに超イズムの世界である。聖書それ自身も惨憺たるものですよ。いろんな誤訳があってみたり、原典から写しそこないがあってみたり。いいですよ。けれども、どうしてもこれをやっつけることができないというのは、なぜですか。神の霊がこの中に働いているからです。神の次元がここに切り込んできているからです。

「そういう事態（神の次元）の中に自分の魂が呼吸しないで、何が生きているか、

何が信仰か」

と言いたい。

●絶対次元の霊をいただく

私はこの36年間と言いましても、始めの10年くらいはまだ本当の聖霊の世界にいなかった。いわゆる無教会の流れの世界に棹さしていた。けれども、何か無教会では足りないということを私は感じていた。それが本当の祈りの世界であることを知った。１９５０年から私の事態が変わってきた。それが聖霊のバプテスマを受けてからです。

キリストはこの聖霊のバプテスマを与えようとしている。御霊を与えようとしてやって

いらっしゃる。御霊は即ち絶対次元の霊なんだから。その絶対次元の霊をいただかないで、何がクリスチャンかとパウロが言っているではないですか。キリストはこの絶対次元を与えるところのただ一人の人なんです。

他の人が与えるのではない。牧師さんが与えるのでも、私が与えるのでもない。キリストが、このただ一人のキリストが絶対次元の世界を開示してきた。地上に親しく来られたけれども、彼らはこの絶対次元をつかめないんです、いくらキリストにぶつかっても。キリストと握手しても、一緒にご飯を食べても、ダメなんだ。それは聖霊が来ないから。それをまたキリストは分かっていらっしゃる。聖霊を与えるために、キリストは道を備えられた。それが十字架の道なんです。

どこへ行っても、教会には十字架が立っているよ。だけれども、何の十字架ですか。聖霊を与えんとするところの道がこの十字架の門なんです。だから、私はいつも「門」という字の中に「十」の字を書く。

「我は門なり」

という。諸橋先生の大漢和字典にもこの字はない。これは私が作ったんだから。

あの大漢和字典は——先生は途中10年間、失明したんですよ。名医によって目が開いた。それでまた続けた。あのぶ厚な全12巻の字引を——一遍火事にあって原稿も焼かれ、組版も焼かれた——まぁ、あれだけの打ち込んだ仕事を私は他に知らない。だから、私は敬意を表して買った。あれを開いて読んでごらんなさい。それ自身がおもしろいから。漢字は世界最高の文字です。はっきり言います。日本人は漢字をいい加減にしていてはダメです。漢字制限なんてとんでもないことをしやがったから。この頃は少し気がついたものだから、制限を解きだしたね。そうだよ。素晴らしい文化ですよ、漢字というのは。非常に味がある。それを変な略し方をするから、意味がまたおかしくなってきた。漢民族というのは素晴らしい。

皆さん、驚異するものに本当に驚異する魂にならなかったらダメですよ。私は別にあなた方に言うわけではないけれども、今の若い人たちはどうも感激性が足りないね。感激性とか偉大な抱負とか、どこへ行ってしまったんだ、日本人の魂は。この「民主主義」なんていうのはとんでもない間違いだと思っている。本当の民主主義はいいですよ。だが、今言っている民主主義なんて言う前に、まず本もの世界に入らなくては。それは宗教の世界です。

世界の歴史の精神界をどん底でリードしていたのはキリスト教と仏教です。キリストとお釈迦さん。これは何と言ったってケタ違いの人間です。もちろん、キリストはお釈迦さんよりもまたひとつ上ですけれども。お釈迦さんは悟りを開いたけれども、キリストは悟る必要もなかった。初めからもうその世界にいる。12歳のキリストが神殿で祭司や教法師たちと問答して、彼らが12歳のキリストに驚いたんだ。かなわない。初めから天来のものを持っているから。

そして、何よりもキリストは祈りの人でした。父の懐の中で祈っている人でした。皆さん、祈るときに、キリストの懐の中に入ってくださいよ。十字架で門が開かれているんだから、キリストの懐の中に入って祈る。力がくるです。聖書に書いてあるようないわゆる奇蹟は、奇蹟でも何でもない。これは霊的な法則の働いている現実なんです。我々を通しても、必要とあれば、神さまはそのようなことをなさる。私も幾人かの人たちを私を通して神さまは助けられた。

●バカにならなくては

そのようなキリストという唯一人者、

「**天上天下、キリストの他にわが慕うものなし**」

と詩篇73篇に書いてあるじゃないですか、

「**汝より他に慕うものなし**」

と。それは、他に慕うものだって相対的にはあるでしょうよ。しかし、絶対的な意味においてキリストの他に慕うものはありません。

「**我よりも何々を愛する者は我に相応（ふさわ）しからず**」

とキリストは言われる。

そういうような魂ならば、私といくらでも一緒に行けます。それだけの気合を持たなかったら、みんな私を棄てて行きます。私を棄てていくならば――私がどうであるかではない――信仰の事態を本当につかんでないからです。私は可哀相でしょうがない。何を見ているかと言いたくなる。

私はこのクリスマスを本当に力強く祝いたい。ただ

「クリスマスおめでとう」

ではない。キリストは十字架にかかりに生まれてきた。そして、驚くべき生命の甦りをもって、

「これが本当の生命だ」

と言って、弟子たちに現れた。女の人たちに現れ、初めはみんな驚き怪しんでいた。どうしたのかと。復活のキリストはお魚まで食べたじゃないですか。

「そんなことがあるか」

と普通、思うでしょ。あるんですよ。このイエス・キリストの霊の生命というものは、与えられる神さまの生命というものは、なんと素晴らしいものかと思う。

物理の世界だってそうでしょ。あの原子力というものはもの凄いものだね、水素爆弾なんて。あんなのが爆発したら、地上はどうにもならんじゃないですか。物理の世界でもあんなもの凄いものがあるのに、いわんや霊の世界ではそれ以上のものがあるんです。今、電波はこの部屋の中に満ちている。テレビやラジオをかければ、それが聞こえてくる。我々

の耳には分からない。霊の耳が、霊の魂が開かれてくると、そういう世界に即入る。
　バカにならなくてはダメですよ、バカにならなければ。頭で考えているうちはダメですから。全身で体そのものでぶつかっていく。そういう受けかたをしなかったら、この唯一人者の無限無量の事態は展開してこない。今度は逆にどんどんそれを伸ばしていく。また、そうなったらば、もう何がきても驚かない。驚かないどころではない。キリストが、
「**幼児**（おさなご）**のごとくならなければ、天国に入れない**」
と言われた。童心です。もう大人になると、みんな出来上がったような顔しているよ。私はあの出来上がったようなのが大嫌いなんだ。ゲーテさんも、
「出来上がったものはダメだ。常に展開して止まざる人であれ」
と言った。あの大詩人ゲーテはそういう人でした。
「これでいい」
なんていうところはない。
「幼児の心をもって」
ということは、
「全存在をもって受けとっていけ」
ということです。
　この頃の幼児も少し小賢（こざか）しくなって困るよな。すぐなにか理屈を言うよ。これは親と教育者が悪い。一番今、反省しなければならないのは親と教育者なんです。
「若い人がどうのこうの」
と言ったって、元はどこから来たかというと、教育者と親が悪い。それはドイツに行ってごらんなさいよ。ドイツの婦人は、よその子どもでも間違ったことをしたら、ピシャッと叩いたり、はっきりやりますよ、もちろん怪我はさせませんけれども。そして、そのお母さんはむしろ感謝するわけです、正しくしてくれたことを。ドイツ人の姿勢はやはりそういうところがありまして、本当の意味で彼らはやはり優れた民族です。
　日本人は――私は時々言うんだけれども――シルバシートに若いのが腰掛けて平気でいるではないですか。何事かと言うんだ。老人が来ても、ちっとも見向きもしない。私はシルバシートの所に行って、そのお世話をやいているんだ、
「君、この人をかけさせなさい。ここはシルバシートだ」
と。こんなことをやっているのは私一人かね。本当にやってますよ、私は。実地教育しなければしょうがないんだから。日教組なんて悪い教育をしているものだから。まだ小さな子に
「お前はどう思うか？」
なんて聞いてもダメですよ。「どう思うか」ではない。はっきり教えていかなければダメです、
「学べ」

と。一人前になんかしてはダメです。20歳を越えてから、大いに一人前になってください。自分で躓いたり転んだりすれば分かるから。日本はこのままで行ったら、もう本当にどうなるんでしょうね。毎日、憤慨にたえないから、身体がおかしくなりそうだ。毒素が湧くからね、あまり憤慨してはいかん。ヘビもあれは噛みつく時に毒が出来るそうだね。毒蛇は、解剖してみると毒がないそうだ。非常に不思議なものだという。

●十字架の門

そういうことで、どうぞ、皆さんはこのイエス・キリストを迎えることは、そのような本当の次元に入れられることです。急に病人ができたりいろいろしますよ。けれども、いろんなことにでっくわすと、私は逆に強くされる。いろんなことにでっくわせばでっくわすほど強くされる。これはどういうことだろうね。私は元来弱い人間なんだけれども、人間的な頑張りでなくて、何をかというものがくるんです。これはありがたいです、この聖霊というものは本当に。

「聖霊」という言葉は何か躓きになっているようだね。

「聖なる霊だから、私みたいな汚れた中になかなか入ってきそうもない」

なんて。それは入って来ないよ。ところが、聖霊は、破れの汚れのダメなやつのところに入って来ようとしているんです。私自身がそうだから。それは十字架でちゃんと入る門が出来ているんだ。

「私は十字架でみんな引き受けたよ」

というのがキリストの十字架でしょうが。

「何も心配はいらん。お前を全部贖いとった。苦しみも悩みも、悲しみも憂いも、妬みも争いも、いろんなものがあるね。だけれども、いいよ。心配するな。私はみんな引き受けて、そいつを全部棒引きにしてしまった。さぁ、来なさい、来なさい」

と、キリストが言われる。そこが幼児の如く入っていく門なんです。平伏（ひれふ）して入っていく。威張って入れないよ。無条件降伏して入っていくんです。そこには御霊がくる。

「まだ私はなかなか聖霊が臨んできませんが、どうしたらいいんですか」

なんて、

「どうしたらいいですか」

もヘッタクレもない。十字架をはっきり見てください…（異言）…。そうしたば、この御霊は来るんです。何を考えているんですか、みんな。幼児でないから、すぐ考えてしまう。

「我思うゆえに我あり」

なんて、ちっとも在りはしないよ。デカルトは余計なことを言った。シュヴァイツァーも

「あの言葉は躓きになる」

と言って批判してます。

「我はキリストにかくのごとく愛された。だから在るのである」

と、それだけの話です。

●私自身が唯一人者とされる

福音書を読んでますか。福音書を読んで、

「これは他の誰もが出来ない、誰もが言えない。やはりこれは神さまの子だ、ケタが違う」

と。ケタが違うから、キリストに「こうせよ」なんて言われても、キリストの言葉は出来ないんです、水を割らないで言っているから。

「**父の全きが如く全かれ**」

なんて。そんな言葉があるですか、

「**神さまが全きごとく、お前は全かれよ**」

なんて。ずいぶん無責任千万な言葉ですよね。ところが、無責任ではない。

「私に来てごらん」

ということなんです。イエス・キリスト自身が、

「**私は何も出来ない。何も言えない**」

と言っていらっしゃる。驚いた人ですよ。

「**何も出来ない、何も言えない**」

という人が一切のことを為し、一切のことが言えている。全く神の中に彼は入っている。

「**我と父とは一つなり**」

と言う。一なる神さま。唯一なる一者。一者なる神。この神の中に彼は百%に入ってしまった。無者だから。だから、彼は唯一人者になったんです。唯一人者とは正に神を百%に生きた人ということです。

そのような角度はどういう魂かというと、キリストは言われた、

「**幼児だよ**」

と。死に至るまで童心を失ったらダメです。どうしようもない。

まぁね、出来上がったような偉そうな顔しているけれども、私はおかしくてしょうがないんだ。神さまの前に平伏さないで、人間かという。今は神さまの前に平伏さないやつがたくさんある。だから、私は

「敬天愛人」

という言葉をD学園でも掲げてやっているけれども、本当にこれに感激している先生が幾人いるか知らんよ、私は。余計なことを言って申し訳ないけれども。

「校長さん、本当ですね」

と言ってくれる人がいまだかつて一人もいない。もういい加減でやめた方がいいかもしれないね。私は「校長」なんてもちろん言われたくない。校長づらなんかしてませんから。

　大学の先生も本当の真理の権威を持たない。持っている先生もいらっしゃるでしょう。けれども、暁の星のごとくでしょう。O君は京都大学でがんばってもらわなくては。また、伝道者が、本当に御霊を受けている伝道者が、これまた少ない。皆さん一人びとりがこの福音にでっくわしたならば、パウロが

　「わが福音」

と言った、この「わが福音」ですよ。その他に何を求めるんですか。いいですか。それだけの世界を私はいただいているんです。私は地上の生涯が終わるまで、たった独りになっても叫んでいきます。

　キリストの唯一人者をいただけば、私自身が唯一人者とされる。あなた方一人びとりが唯一人者とされる。本当の自由はそこにある。

　「御霊のあるところに自由あり」

という。一人びとりが本ものになるときに初めて、それが本当のコイノニアの世界になるんです。本当の交わりの世界になる。そうしたら、躓いたり転んだりしたら、

　「よし来た」

と言って担いで行きます。それが本当の友情です。それを批判するようなことをしていたなら、本当の聖霊の愛の世界ではない。人間だから、躓いたり転んだりするよ。

　キリストの福音はいわゆる思想ではない。聖書の福音の世界は、どんなイズムとも、どんな思想とも、ケタが違う。この唯一人者こそが万人を本当に救うことができるんです。一即無限なんです。この一は無限に展開する。この「一」は何かと問われれば、私は「無」だと答える。

　「無即無限無量」

と言っているのはその角度です。

　無とか、一とかいう言葉が表す事態は、そういうような神さまの絶対次元の限りなき展開をもった中核、焦点なんです。嵐の目みたいなものです。嵐の中心は無ではないか。嵐の中心は何もない。グルグル嵐は回っていて、まん中は何もない。この中心が来ると、青空が見えてしまう。この無にして無限の力を持っているものが、嵐の中心みたいなものです。これが聖霊の焦点なんです。

　「辛子種一粒の信」

の実体なんです。

● 有機体的構造

　宗教音楽のうまい牧師さんにあこがれて、私の集会から出て行ったのがいるよ。それから、

無教会の聖書研究の方にあこがれて行ってしまったり、またカリスマ的な現象にとらわれて行ってしまったのもいるよ。いいよ、行きたければ行っても。私は本当の中心をいただいていています。また、それを限りなく追求して進んで行きます。御利益に非ず、観念に非ず、霊的傲慢にあらず、霊的現象にあらず、根源の事態を本当にいただいて、それでそれが千変万化、自由自在に展開するような世界です。第一流の人物はみなそのような角度を持っていました。

私は今度の『芸術のたましい』にも書きましたが、ダンテやゲーテみたいな人は、棟方志功でも、そうです。始めの「芸術のたましい」というところを読んでごらん。おもしろくてやめられないと思う。私はこれを一気呵成（かせい）に書いたからね。こういうのは論文でも何でもない。何と言っていいか分からない。このキリストに入ると、いわゆる範疇に入らなくてなってしまうんです。

楽しいでしょ、皆さん。皆さんも、一人びとりの顔が世界中に一つしかない。みんなその顔は――Ｏ君の顔はＯ君唯一人なんだ――他にありはしない。人格というのは、一人びとりがそのようにつくられている。そればかりではない。指紋を見てごらん。こんなに似ているかと思えば、指紋で分かってしまうんだからね。神さまの業というのは、神さまの芸術は大したものですよ。指紋を見てびっくりした。私は指紋をとったことはないけれども。これは万人が違うんだから。不思議なもんだよ。

それほどまでに神さまは驚くべき芸術家です。最大の芸術家は神さまなんです。その中に入ったら、あなた方の生涯そのものが本当の芸術になる。「芸道」と言いたいくらいです。何をしていても、人の目にはどう映っても、そんなことは問題じゃない。天国を構成するところの、のっぴきならない一人びとりなんです。私が天国のどこを構成させられるか、天国は驚くべき神さまの有機体的構造なんです。私はもの凄い天国界を書いてみたいと思っているけれども、もう少し先の話だよ。

人生は、地上はただ序曲に過ぎない。本曲は上の世界です。そういった、地上の世界の次の世界を本当に隣の部屋へ入るように、ちょっと唐紙外して隣の部屋へ入るように思っていなくては。それだけの烈々たる魂になってくださいよ。

●「汝然り、我否」

旧約の預言者たちは、いつかも少しふれました。今日は、祈祷会のときに旧約の最大の預言者のところにふれます。預言書たちをとおして神さまの真理が七色の光のように展開していった。旧約聖書の預言書はよく読んでください。あれはみんなほとんど詩文ですから。今の口語訳ではダメだな、文語訳でないと。

神の義を徹底的に語ったのが預言者アモスです。義は旧約から新約まで貫いているわけです。信義という。これはヘブライ語で言うと同じ言葉なんです、二つ言葉もあるけれども。

「信」という字は「アーメン」という字です。「エメツ」という。「義」は「セデック」という。

「アブラハム、エホバを信ず。エホバ、これを彼の義となし給えり」

という。アブラハムは子どもがいなかった。サラも自分も年をとってしまって、もう子どもは産まれるような年齢ではない。けれども、アブラハムは、神さまが、

「子どもが与えられるよ」

と言ったから、

「はいっ」

と答えた。「はい」と言うのが、これが「信」という字です。「アーメン」と言った。そしたら、神さまはこれを「義」「セデック」となした。創世記15章6節です。この、

「アブラハム、エホバを信ず。エホバ、これを彼の義となし給えり」

という、あの一句は聖書で最も大事な句の一つです。神さまに「然（しか）り」と言ったら、義が与えられたという。即ち、信とは、

「神を然り」

と言って、

「己を否（いな）」

と言うことです。自分の判断なんかを乗り越えてしまうことが信なんです。

「私もそう思いますが」

なんていう、そんな暢気（のんき）なのではない。自分の理性や何かをみな乗り越えてしまう。神さまに「然り」と言う。

「私は分かりません。分かりませんが、あなたが仰るから、はいと言います」

と。それが信なんです。そうしたらば、向こうをプラスとしたら、こっちはマイナスで電気みたいに放電する。神さまはそれを、

「義となした」「よし」

と言った。即ち、神と人との関係が、神と我との関係が、汝と我との関係が――「神」と三人称で言う必要はない。汝と我です――「汝と我」との関係は、

「汝然（しか）り、我否（いな）」

と言って対するのが、これが信の世界、これが義の世界なんです。これを信義という。今はもう、信義を裏切るやつがたくさんいるよ。この信を、この義をアモスはとらえた。

●キリストに焦点

ホセアという預言者がいました。イスラエルの人たちは神さまに対する信仰を非常に失ってしまって、他の神々を拝んだりした。これは宗教的姦淫罪なんです。ヤーヴェーの神さまは、「お前たちはしょうがないやつだ」と。それで、ホセアは、自分の奥さんは悪い奥さんで他の男と関係して子どもが出来たりした。けれども、

と。

「あの悪い奥さんを捨てるな。私が不信のイスラエルを捨てないように、お前もあれを買い戻してこい」

と。

「相手の如何（いかん）にかかわらず、相手がダメならばいよいよそれを愛せよ」

と。愛とは、相手の如何にかかわらず、貫いて相手を救うことが愛です。「愛する」とは「救う」ということです。それで、買い戻して、ホセアは何と言ったかというと、

「お前も私のところにいなさい。私もそうするから」

と。自分は何も悪いことをしないのに、

「私もそうするから」

と言った。相手の立場に自分を置いた。これがキリストです。この「アモスの義」と「ホセアの愛」、これはみんなキリストにおいて百％に展開しているわけです。

預言者はたくさんいるけれども、もう少し言っておこう。ミカという預言者は、

「謙（へりくだ）りて神と共に歩く」

という。謙って、平伏して神と共に歩く。共在です。平伏して神と共に歩いた。これもキリストが正にそれをやった。

イザヤは、神を聖者として拝んだ。神を聖者として、「聖なる者」とした。

「カードーシュ（聖なるかな）、カードーシュ、カードーシュ」

と言う。我々は汚れた者だ。しかし、これを聖なる者とする。聖なる者はどこまでも、このダメな者の中に入ってきて、そしてこれを聖化する。キリストも肉の弱さを背負ってました。キリスト自身も危機的存在であった。

「御名を崇（あが）めさせたまえ」

という。「御名を崇める」というのは、

「御名を聖とせよ」

ということです。神の御名を聖とする。その聖がこっちに来るから、キリストを受けとる私たちはみんな「聖徒」と言われるわけです。手放しで直接的に私たちは聖徒ではない。聖なるこの救いを与えられて、そして、神の聖なる生命をいただいているから、聖徒です。「聖」という字を私したらいかんですよ。

エレミヤは心の預言者、ハートの預言者です。非常に温かい人でした。涙の人でした。ユダの国が没落する時に現れた、ユダの国と共に滅亡を刈った預言者です。これはまた、ルカ伝に表れてくるキリストみたいに本当に深い温かい心の預言者です。キリストの心を心とせよということです。

義、愛、共在、聖、心と、いろいろあります。それからエゼキエルがいる。これは霊です。もちろんこれらはみんな霊ですけれども、特にエゼキエルは非常に霊的な幻を見た預言者です。エゼキエルだの、ヨエルなんていうのは聖霊の事態です。聖霊の事態を特に表した。

こんな預言者たちはみんな流れて、キリストの中に入ってきた。正にキリストはこの七色の――「七」に限りませんけれども――七色の光が焦点して無色透明になる。これは無色の世界です。キリストという無色は、この一切のものを持っている無色透明です。白光です。これはキリストのほかにいない。キリストは預言を全部、百％に自分で実証した。それはそうだよ。神さまから与えられているこれらのものがまたキリストというところに焦点を結んでしまった。

●唯一人者を受けとれば唯一人者になる

私たちは、どうせ有限な人間なんだから、これを全部というわけにいきませんよ。けれども、それぞれ、あなた方一人びとりの特色がある。天から授かったところの天賦の特色がある。何でもいいです、どういう色でも。また音に例えるなら、どんな楽器でも何でもいい。私はバイオリン、私はピアノ、私はオルガン、何でもいいよ。絵であろうと、彫刻であろうと、縫い物であろうと、何をしようとかまわない。とにかく、そういった才能において、キリストの生命によって全生命を打ち込んでいけば、それがキリストの栄光の現れとなる。二段構えに言わなくたって、もう栄光が現れている。

このキリストという唯一人者を受けとれば、あなた方がそれぞれの特殊性においてその**唯一人者**になるんです。人まねはひとつもいらん。人を妬むことも何もいらん。一人びとりが本当にその特殊性をもって現す。

こちらの赤いバラの花はそのような姿と色で、そちらの黄色のはそういう姿と色で、太陽の無色透明の光りを黄くしたり赤くしたりしている。不思議だね、大自然というものは。どうして、黄色くなったり、赤くなったりするのかね。植物学者もそこまでいったら、分からなくなってしまうのではないかな。学問なんていうものは大したことない。

「それはなぜか、どうしてか？」

と少し聞いていくと、分からないという。

「分からないということが分かりました」

と、これはソクラテスがちゃんと言っている。ゲーテも『ファウスト』の始めの方に書いている。

本当に

「ああ素晴らしい」

と言って、神さまを拝する。野の一つの百合の花に――あの「百合の花」というのはアネモネらしい。そのアネモネの一つに――ソロモンの人工的なきらびやかさもかなわないという。キリストはちゃんと神の大芸術の一端を見ていらっしゃる。神さまの創造の最後には女性がつくられた。女性は神さまの傑作ですよ。そのつもりで自分を大事にしてください。

唯一人者というこの唯一者に、私たちは本当に自分を投げ入れることです。キリストは、

馬槽に生まれた。どん底の生まれ方をしました。これ以上の貧しさはないわけです。とは、彼の生まれ方がそうだった。彼の魂がそうだった。彼の魂は無、一、物、無尽蔵であった。

「幸いなるかな、貧しき者。天国はその人のものなり」

とパウロが言っているではないですか。パウロというのも凄い入りかたをしたものですよ。だから、あのパウロさんの書簡を見ていると、まぁ、驚くべきものでしょ。思想ではないですよ、新約思想でも何でもない。パウロは押し出されて、止むに止まれずして語っているんだ。

「キリストを持つものは全世界を、宇宙を持つ」

私は第三巻の『無の神学』なんていうのを書くけれども、神学ならざる神学を書くから。キルケゴールやニーチェばりのものを。まぁ、あまり宣伝しないことにしよう（笑）。それはいわゆる論理ではない。

何か知らんけれども、私がこうやってしゃべっているうちに、あなた方はその世界に入っているでしょうね。私は口でものを言っているのではないから。私は、なぜこうやって柱に寄り掛かっているんですか。くたびれたからではないですよ。キリストに寄り掛かっているんです。そういうように、キリストに寄り掛かっていなくてはダメなんです。

●天の歴史に記される

キリストは、これ以上の下というところはない下に入ってしまった。どん底に。そういう生まれ方です。そして、ヘロデに狙われて殺されようとした。エジプトに逃げた。それは夢で天使に示されているわけです。しかし、キリストの誕生には、他の幼児たちが、長子が犠牲になった。ヘロデに殺された。とんでもない悪いことをするね。キリストはその幼児の魂をみんな天界に救われたでしょう。何と言っても、天界で一番キリストの近くにいるのは幼児に相違ない。

人間は、ちょうど上流の小川はきれいだけれども、もう東京なんかを通るときにはどうにもならん。隅田川なんて、昔はあれでも少しはきれいだった。人間も歳をとればとるほどどうにもならなくなる。しかし、これまた妙なものでね、私も70歳を越えてきたけれども、だいぶ逆になる。また幼児に、元へ返っていくようだ。簡単になる。面倒臭いことは嫌になる。けれども、私はボケませんよ、まだ（笑）。忘れっぽいことは天下一品だ。すぐ忘れてしまう。これは忘却の恩恵という。忘れてしまって、申し訳ないことがたくさんあります。けれども、余計なことは覚えない。先に神さまの方から示される方が楽しいからね。

マリヤのさっきの祈りのところにもあったように、すべて価値の転倒がくる。この世で尊ばれるもの、そんなものは大したものではない。この世の歴史で描かれるものは大したものではない。あなた方の生涯が天の歴史に記される。刻印されるそういう歩きかたです。ニーチェが

「あらゆる価値の転倒」

と言ったけれども、福音は正に「あらゆる価値の転倒」をなさる。

「幸いなるかな、貧しき者。天国はその人のものなり」

と。それはいろんな意味において貧しいのがいいんです。

「あれども無きがごとく」

とパウロが言ったように、一切のものは神のものなんだから、神有なんだから。

しかし、小さい子を見ていると、お饅頭があると、やはり大きい方を取るものね。それで大変だよ、大騒ぎだ。それは人間の本能らしい。欲心というやつだ。欲の種類を変えればいいんですよ。

「欲を持つな、無欲であれ」

なんて言ったって、むずかしいから。欲の種類を変える。勉強に欲を出せとか、人に尽くすのに欲を出せとか。結局、それは愛ということになるけれども。

「キリストをつかむことにおいて、私は無限の欲を持つ」

ということにならなくては。これが本当の無欲の欲になる。

●すべては神有

だから、すべては神有(しんゆう)です。共有も私有もみなこれは神の有(もの)である。そこまでの自覚をもって私たちがお互いの交わりをすれば、それは本当に問題がなくなってしまう。どうせ、次の世界に行くときに何かを持って行けますか。私はこの聖書だけは持って行きたいけれども、この聖書も持って行けない。次の世界に行くときには、手ぶらで、肉体は捨てて、霊体をいただいて、地上のものは何一つ持って行くわけにいかん。金を貯めて、あれどうするんだろうね。後は遺産相続で大騒ぎだ。死ぬときにはみんな無い方がいい。

私のこの聖書は博物館行きかもしれない。この聖書は大変な聖書です。マルチン・ルターの１５３４年の初版ものの、そのままの写しなんです。写真版です、これは全部。限定版でね。これを私が買った時、五万円だったけれども、今何万円するか知っているかな。これは百万円以上ですよ。こないだ、そのことを知ったので、びっくりしてしまった。百万円でも、これは離さないよね。こういうのはもう博物館へもっていく。あなた方、買うなら、第一流のものを買いなさい。それでないとバカらしいよ。そして、あとはみんな然るべきところへ持っていけばいい。

私たち自身の存在そのものが神有です。神さまの有です。ですから、この唯一人者をいただきますと、

「我を見し者はキリストを見しなり」

ということになる。私を見たって、キリストは見えないよ。だけれども、私の奥に御霊のキリストがいらっしゃる。お互いの一人びとりの中に、その御霊のキリストを見て、そし

て交わることです。

私は学校の長だけれども、先生方はいろいろな人がいるよね。それぞれの善さというものを見ている。人は好き嫌いをしてはいかん。それぞれの善さを見て、それを私は評価しながら、先生方と交わっている。いろんな悪い癖のやつもいるよ。けれども、悪いところを見たってしょうがない。

「悪いところを見るのはサタンで、善きところを見るのは天使だ」

という言葉があるが。お互いの交わりというのはそうですよ。その善いところを見て、それの更に展開していく姿を信じながら、お互いに進んで行く。それが本当の執成しです。そして、こっちから――見るばかりでない――与えることができる。それは聖霊の世界だから。相手を助ける。

●キリストの霊は何ものとも代えられない

だから、皆さん一人びとりが本当に御霊の器になれば、そういうことに自然になるわけです。

「なんと不思議だろうね」

と、あなた方も感ずるようになるよ、この御霊をいただいたら。キリストの霊と代えることのできるものは、天上天下、東西古今、何処にもありません。キリストの霊はもう何ものとも代えられない。

「キリストの霊とは何ぞや」

と問うならば、

「マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、この福音書に徹底的に親しんでください。キリストに本当にしがみついて、キリストにつかまってください。捕まえられてください。御霊は必ずそこに来るから」

と。それをみんな頭で、体裁で読んでいるんだ。それで、

「意味が分かった」

なんて、意味が分かってどうなるんですか。

彼は、地上においては弟子たちと居て、あれだけ弟子たちを愛し、また救おうとしたけれども、どうにもならないことをキリストは知っていらっしゃった。一番弟子のペテロも三度キリストを否んだ。弟子たちは散り散りに逃げた。かえって、幾人かの女性は幼児の心を持っているから、キリストを信じぬいたでしょう。大体、男はダメなんだ。天国では女性の方が上になる。ダメだと言っても、何も失望することはない。聖霊がくれば、男も女も、これは永遠の男性、永遠の女性になる。それが本当の永遠の人間なんです。

「永遠の生命」

と言うから、私は

「永遠の人間」
と言いたい。御霊がくれば永遠の人間になる。

とうとうキリストは独りで十字架にかかった。彼は本当に孤独です。ただ神さまとだけは全く一つですが、その他は彼は孤軍です。だけれども、天の万軍がいる。

私もこの福音において孤軍的である。けれども、天の万軍がある。だから、私は
「孤軍万軍」
という言葉が自然に出てきた。私は、無教会が何人いたって、びくともしない。何も偉がって言っているのではない。御霊がびくともさせない。あなた方一人びとりが本当に孤軍万軍です。いろんなことにでっくわして、除け者にされても、決してへこたれてはいけませんよ。敵が多ければ多いほど強くなる。マルチン・ルターがそうです。あの宗教改革者が、
「我ここに立つ。主よ、助けたまえ」
と言って、あの時のローマ法王とローマンカトリックに対して盾ついたけれども、これは本当に彼は死を覚悟した。自分の先輩のヨハネス・フスが火に焼かれた時に、
「私が先に焼かれるはずだったのに」
とルターは言った。福音のためには本当に捨身の態勢でルターは戦った。

皆さん、このキリストを本当に内に宿してごらんなさいよ。もうどんなことがあったって、行き詰まりはありませんから。
「艱難汝を玉にす」
と言うけれども、玉砕すれば玉成してくださる。本当にありがたくてしょうがないです。

●私たちの中にキリストの降誕を実現する

降誕節でありながら、私は十字架のことを語らざるを得ない。キリストが地上にいらっしゃったから嬉しいのではない。救いの原点は救いの終点と始終一貫しているから。
「始めはまた終りなり」
という。普通の言葉では、終始一貫というけれども。どん底の現れ方、生まれ方をしたのは、どん底の死に方をするために来た。十字架はどん底の死に方です。万人の罪を背負って、旧約聖書の事態を全部成就して、
「もはや旧約聖書は要らん」
という。彼は十字架上で異言の叫びをした。その時に、至聖所の幕が二つに切れてしまった。これは旧約の宗教をアウフヘーベンしたわけです。
「もう要らん、成就した」
と。
「**律法の一点一画も廃(すた)ることはない**」
と言ったキリストは、律法を完全に満たして、超律法の世界を私たちに与えてくれた。こ

れが霊法の世界です。霊的法則の世界、ダルマの世界です。これを受けとったら、これは十字架のどん底から――馬槽のどん底の生まれ方をして、十字架のどん底の死に方をして――一切を救いあげてしまう、担いあげてしまう驚くべき聖霊の力です。この御霊の力がやってくる。だから、福音なんです。

「十字架と復活と聖霊降臨」は切っても切ることができない。私たちは復活節とペンテコステを祝うけれども、いつも私たちはこの三相一貫で進んで行く。

私たちの中にキリストの降誕を、祝うのでなくて、降誕を実現する。キリストの降誕を実現するとは、ただ想像している世界ではない。キリストは御霊によって生まれたんでしょうが。私たちが今日、御霊によって生まれなかったならば、キリストを迎えたクリスマスの本当の内実はないことになってしまう。

だから、今も既にあなた方の中に来ていると思うけれども、この祈祷会において、御霊の生まれを、御霊におけるところの生まれを新しくもう一遍やって進んで行きたいと思っています。では、時間がきましたから、終わります。

●祈り

祈ります。われらの贖い主、キリストの御主さま。長くあなたがイスラエルの歴史を導き、ついに人類のために天界のキリストを地上のイエスとしてお送りくださり、しかもそれは実にどん底の生まれをもって、担いの事態を既に表し、そして、その地上の生涯はあなたと唯だひとり、本当の道を貫きぬいたところの主さま。事実をもって証し、また恵みをもって証し、私たちにこの十字架の贖いを賜い、聖霊の限りなき恩寵を賜うところの主さま。心から感謝いたします。

その内実において、私たちはこの降誕節を一同心をあわせて迎え奉り、御名を讃え奉ります。たくさん祈りたきことがございますが、この今年のあなたのご恩寵、また私たちのダメさかげんはお赦しただき、しかし、あなたのご恩寵をいよいよ新しく受けとり、そして、来年に向かっていよいよ御霊の御導きのもとに、また御力のもとに、力強く前進したく存じております。兄弟姉妹たちのそれぞれの場所において、あなたがのっぴきならない歩き方をなさしめ、また、悩める者、苦しめる者、悲しめる者に本当の福音の事実を身をもって与えていくことができますように、御導きください。

今日は特にSさんがこのようにして療養所からいらっしゃって、このクリスマスを共にできたことを本当に嬉しく存じます。いよいよSさんのお身体をあなたが深く守り、そして力強く生命を与えてくださるように願い奉ります。その他いろいろでございますが、どうぞ、喜びも悲しみもまた悩みも、すべてあなたが最善にしてくださるように願い奉ります。今、心からの感謝と讃美、御名により献げ奉る。アーメン。